

心光院所用鉄線蒔絵膳 一具（小浜市中心光寺蔵）

開館5周年記念特別展

酒井忠勝にみる近世大名の姿

1. 展示のねらい

当館では平成7年9月30日（土）から11月5日（日）まで、開館5周年記念特別展として「酒井忠勝にみる近世大名の姿～川越藩祖酒井家ゆかりの品々～」を開催致しました。

本展覧会では、江戸時代初期川越藩主を務め、城下整備や寺社の復興などに尽力した酒井家三代、酒井重忠・忠利・忠勝の三人に焦点をあてました。とりわけ、酒井忠勝は「大老」という江戸幕府の要職に就いた人物でもあり、忠勝ゆかりの資料を

中心に据えて、近世初期譜代大名酒井家の姿を紹介しました。

2. 展示の構成

この展覧会でとりあげた酒井家が、主家徳川家との親密な関係や、江戸時代初期の譜代大名としての特色が浮かび上がるように展示構成をしました。すなわち、国元の藩主という側面・幕閣の要人として幕政の運営に携わっていた側面・藩主の趣味・教養などたしなみの側面を通して、酒井家の姿を紹介しました。

(1) 酒井家の歴史

酒井家は三河時代からの門閥譜代として、主家徳川家（松平）と親密な関係にありました。

酒井氏の始祖広親の長男氏忠の系譜を「左衛門尉酒井氏」、次男家忠の系譜を「雅樂頭酒井氏」と称していました。川越ゆかりの酒井氏、つまり重忠・忠利・忠勝は、雅樂頭系にあたります。

重忠の系譜はのちに、姫路藩十五万石の藩主となります。忠利の系譜は嫡子忠勝の代に、川越から小浜に移封し、以後忠勝の子孫が代々小浜藩主となりました。

現存する酒井家文庫資料には、忠勝の代に確立された酒井家の家格や由緒を示す多くの資料が、残されています。また、川越時代の事績を記した資料もあります。



「忠勝公年譜」（小浜市立図書館蔵酒井家文庫資料）

(2) 忠勝と江戸幕府

江戸幕府は三代将軍家光の代に、幕藩体制が確立しました。それに伴い、幕政を運営する大名たちの間にも大きな変化が生じました。家康・秀忠の時代は、三河譜代で武功派の大名が重用されていました。しかし、家光の代になると、旗本出身を中心とする家光の近習が重用されるようになりました。つまり、武功派から官僚派への移行が行なわれたのです。

家光はさらに、政策を安定路線に変更し、朝廷との融合に努めました。

家光の時代に生きた酒井忠勝は、三河譜代大名の家柄であり、家光が幼少の頃より仕えていた側近です。しかも、家光の政策や時代の流れと忠勝の考え方が一致していたため、家光政権下では、忠勝は不可欠な存在でした。

このため忠勝は、家光の信任がすこぶる厚く、

幕閣内において確固たる地位を築いていました。

(3) 藩主のたしなみ

忠勝は官僚派の大名であり、大変な好学家で知られており、特に宮廷文化に強い関心をもっていました。また、和歌や連歌そして茶道にも長じ、風雅の道に大変通じており、大名としての高い教養を身につけていました。

さらに、信仰心が厚く神仏を崇拝していました。剃髪した姿で描かれた忠勝画像が、このことを象徴しています。

忠勝はこのように、当代きっての文化人である小堀遠州や明の高僧隠元らとの親交が深く、武士である忠勝が江戸初期文化の興隆の担い手のひとりとして、この時代の文化の発展に大いに貢献していました。

(4) 忠勝の藩政

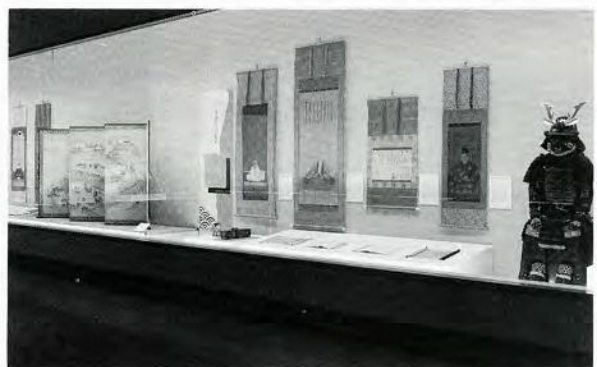
天正18年（1590）から寛永11年（1634）までの約45年間、酒井重忠・忠利・忠勝の三人が藩主として、藩政の基礎づくりに着手しました。

重忠は城下町の整備・拡張を計画し、忠利は寛永元年（1624）に領内総検地を行い、川越藩の財政基盤を整備しました。

忠勝の藩政に関しては「酒井空印様御書下写」の中より、その方針を伺うことができます。つまり、土豪的^{どごう}名主の農民支配を改め、小農民の自立が可能になるための政策を進めていました。

寺社政策は藩政の中でも、特に注目されます。

川越総鎮守氷川神社をはじめ、城内三芳野神社・喜多院など主だった寺社の修理・再建などに尽力しました。中でも、酒井家による喜多院復興には、天海の存在が欠かせぬものでした。



「酒井忠勝にみる近世大名の姿」展示室内



家光と忠勝



1. はじめに

自筆の文書は、筆を執った人間の人柄を伝えるものであり、また、送り主と文書を宛てられた人との関係を示す貴重な資料である。

徳川將軍家の場合、初代家康・二代秀忠・十五代慶喜以外の將軍の自筆文書は、現存するものが極めて少ないといわれている。

今回の展覧会では、酒井忠勝宛の十一月廿五日付の徳川家光書状（小浜市立図書館蔵酒井家文庫資料）を紹介する機会を得た。

現在その他に家光自筆とみなされる文書は、井伊直孝宛の二月廿七日付書状（彦根城博物館蔵）・春日局宛の七月十二日付消息（個人蔵）をはじめ、八点が確認されている。その中のもう一点の忠勝宛書状は、東大史料編纂所の影写本による『小浜酒井家文書』所収の七月五日付のものである。

つまり計九点のうち二点が、忠勝に宛てられている。

このように家光自筆文書の現存状況だけでも、家光と忠勝の関係の程を伺うことができる。

ここでは上記二点の自筆文書の検討を含めて、家光と忠勝の関係について触れてみたい。

2. 將軍家光からの親書

酒井忠勝は、元和六年（1620）二代將軍徳川秀忠の命により、世子家光の^{もりやく}傅役を任せられた。これ以後忠勝は、家光が慶安四年（1651）に死去するまでの31年間、公私両面にわたって家光を補佐していた。この両者は、後の書『明良洪範』に「右ノ手ハ讚岐守」と称せられるほど、お互いの信頼関係が確立していた。

その家光と忠勝の関係を示す資料に、まず七月五日付書状（1）があげられる。

（1）の書状は、寛永十八年（1641）と推定されている。しかし、本文中の文言より、別の年紀の推定も可能ではなかろうか。それは「あまつさへ近年は病者〜つとめかね候事」・「代替になり、〜くわんいにもあけ」の部分である。

「代替」とは家光自身のことを指していると思われる。つまり、父秀忠から家光への代替である。寛永九年（1632）の父秀忠の死によって、家光ははじめて実質的な権力を持ち得ることができたのである。家光自身はそのことを称したのであろう。

「くわんいにもあけ」とは、寛永九年に忠勝が従四位下・侍従に叙任されたことを指していると思われる。

「くにをもつかわし」とは、忠勝の国替え、つまり、寛永十一年（1634）の若狭小浜への移封のことを指していると思われる。

「あまつさえ〜つとめかね候事」の文言より、家光が病のため將軍としての任務を、十分に果たすことができない様子をうかがうことができる。

家光が病に伏したことは『大猷院殿御実記』にもしばしば記されており、この文言からだけでは年代の推定は難しい。しかし先程の三つの文言が、寛永九年から十一年のことを述べているので、それに近い年代のことと思われる。そうしてみると、寛永十四年（1637）にも家光がしばしば病に伏したことが記されているので、この箇所は、寛永十四年のことを指しているものと思われる。

以上のことから、（1）の書状が寛永十四年七月五日のもものと推定することも可能ではなかろうか。

いずれにしても（1）の書状が、寛永十年代に書かれたものであることは間違いのないであろう。

この寛永十年代とは、幕藩体制の確立期にあたり、家光政権が安定していく時期である。家光自身にとって、政治的に重要なときであった。この時期忠勝は幕閣の要職に就いて、家光を補佐している。寛永十二年（1635）の武家諸法度の改正に関与したこと、翌十三年に完成した日光東照宮の遷宮式等の儀式を総監したことなどが顕著な例としてあげられる。

こうした年代に、家光が忠勝に自らの心境を伝える内容の書状を、宛てているのである。その内

容からは、特に「其方の義は、へやすみのおりより人〜其方にも覚可有候」の文言より、忠勝が部屋住みの頃から家光に重用されていたことが読み取れる。

また、「此上は我々心ていのとをりは、〜よしあしにかまいなくたんかうの心もちせんに思ひ候」の文言より、家光が忠勝に対して疎遠なきことを述べていることが読み取れる。

すなわち、家光が政治的に重要な時期に家光自ら筆を執って、忠勝を頼りにし、忠勝の存在の必要性を繰り返し訴えている。家光が、いかに忠勝に対して深い信頼を示していたかが知られる。

(2)の書状は、病に伏した忠勝を見舞う内容のものであり、『小浜市史』では年代を慶安三年(1650)と推定している。『日本書蹟大鑑』では、家光が将軍に就任して、まだまもない時期の頃と推定している。花押をみると、寛永年代に発給された他の家光書状の花押と大変類似しているの、寛永年代に書かれたものと推定することができるのではなかろうか。

家光が忠勝の病を心配しており、文末の「いよ、此上ハ〜申されへく候也」という文言より、忠勝に対してなにも遠慮せず、率直に意見を述べるようにと伝えていることが読み取れる。

(2)の書状からも、家光の忠勝に対する信頼の深さが、並々ならぬものであったことが知られ

寛永十年代のおもな出来事

年号	西暦	出来事
寛永九	1632	二代将軍徳川秀忠卒する。 熊本藩主加藤忠広改易される。 徳川忠長改易される。 酒井忠勝、従四位上・侍従に叙任される。
十	1633	六人衆を設置する。
十一	1634	家光上洛する。酒井忠勝も家光に供奉し、上洛する。 酒井忠勝、若狭小浜に移封する。
十二	1635	武家諸法度が改正される。
十三	1636	日光東照宮が完成する。酒井忠勝その遷宮式等の総監をつとめる。
十四	1637	島原の乱が起こる。 家光、酒井忠勝の牛込屋敷に御成をする。 (以後家光の牛込屋敷御成は、百数十回に及ぶ。)
十五	1638	大老を設置する。 酒井忠勝、土井利勝と共に大老に昇進する。
十六	1639	鎖国が完成する。
十八	1641	徳川家綱誕生する。
二十	1643	酒井忠勝、松平信綱と共に上洛する。 ク 忠勝、従四位上・左近衛権少将に叙任される。 朝鮮通信使、酒井忠勝に家綱誕生を祝う内容の書状を送る。

る。

3. おわりに

この(1)・(2)の親書を通して、家光政権下における忠勝の立場をうかがうことができる。すなわち、家光と忠勝は主従関係にありながら、それを越えて、家光にとって忠勝とは、最も信頼がおけ、気を許して何事も相談ができる存在であったということではなかろうか。

二通の将軍家光の親書には、家光と忠勝の親密な信頼関係の程が示されており、忠勝は家光政権では不可欠な人物であったことが理解できるのである。

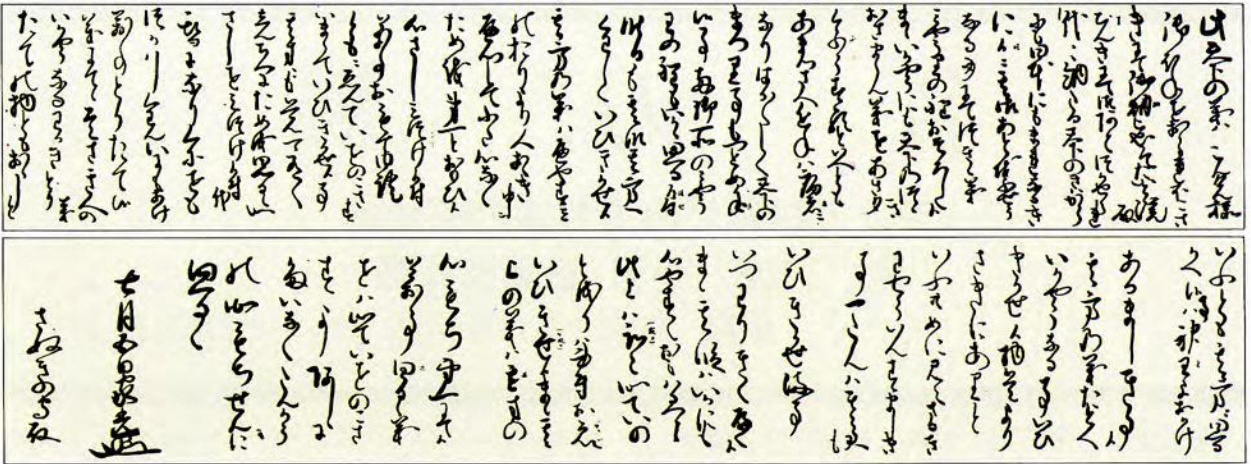
(付記)

今回これらの資料の写真掲載にあたり、東京大学史料編纂所・小浜市教育委員会・小浜市立図書館・小浜市心光寺から多大な御協力を賜った。

ここに、厚くお礼申し上げる次第である。

[参考文献]

小林明「徳川家光・家綱自筆文書の二・三について」
『全国東照宮連合会会報』第18号 1984年
『日本書蹟大鑑』第16・17・18巻 講談社
『小浜市史 藩政史料編一』小浜市 1983年
『酒井家編年史料総覧』小浜市教育委員会 1988年
『酒井忠勝にみる近世代名の姿』
川越市立博物館 1995年

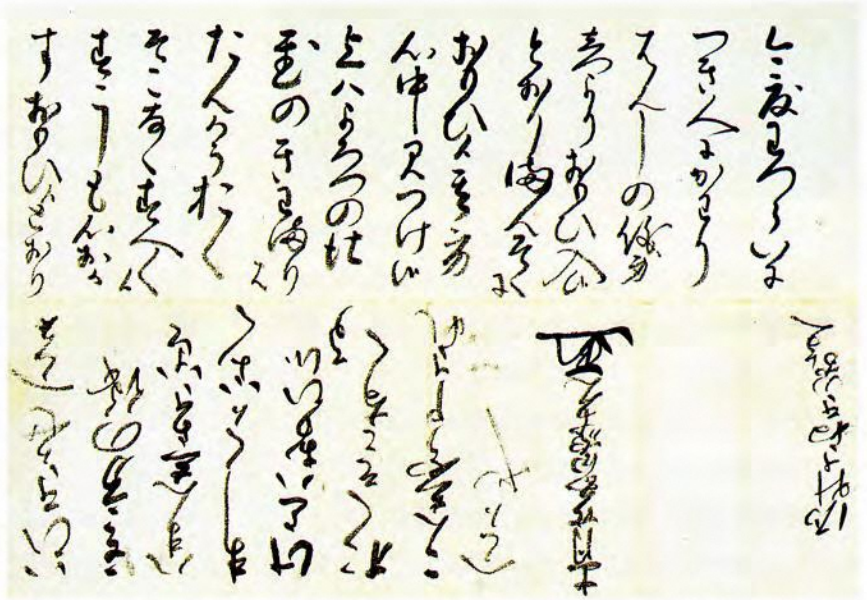


(1)「徳川家光自筆書状」(東京大学史料編纂所所収影写本『小浜酒井家文書』)

此天下の義は、^(一)こんけん様御ほねをおられ、ほこさきにて御納被成候て、^(二)たいとく院殿ひんきにて御あとつかせられ、代々納たる天下のきは、^(三)からにも日本にもまねなるきに候に、其御あとをふせうなる身にてつき候義、みやうりの程おそろしく候ま、いかやうにも天下のつ、きおさまらん義を、あさたくふうするといへとも、あまつさへ近年は病者になり、はかしく天下のまつり事もつとめかね候事、両御所のみやうりの程もいか、思ひ候付、昨日も其段其方へくわしくいひきかせ候、其方の義は、へやすみのおりより人おき中へつしてふた心なく、ためを第一とおもひ候心さしみつけ候付、万事おもて内證ともにあんていをのこさす、いま、ていひきかせ候事、其方にも覚可有候、しんちつにためを思ひ候心さしをみつつけ候付、代替になり、^(四)くにをもつかはし、くわんにいにもあけ、万事のとりたて候義にて候、是さきへの事、いかやうなるわかきとりたての物ともおしといふとも、其方に思ひかへ候事は神よりおかけあるましき事候、其方の義、たとへいかやうなる事いひきかせ候物、是よりさき^(五)ありといふ共、めに見えさるきわ、せういんすましき事、一たんは其事もいひきかせ、満事いつわりきくへく候ま、其段はいかにも心やすくおもはるへく候、此上は我々心てい^(六)のとをりは、書付おを以いひきさせ候ま、其上の義は、其方の心もち第一にて候、万事思ひ候義をは心てい^(七)をのこさす、よしあしにかまひなくたにかうの心もちせんに思ひ候

徳川家光自筆書状 解読文

七月五日 家光(花押)



今度わつらいにつき、人にかわりはんしの儀、身しつよりおもひ入候とおりまんそくにおもひ候。其方心中見つけ候上ハよろつの仕置のさわまりは、^(八)たんかおうくそこなくすへく候。すこしも心おかすおもひ候とおりにいひきかせへく候。其方の儀、八まんしよさいすましく候。いよく、此上ハおもひ候事おくそこなく^(九)こんしやう申されへく候也。

十一月廿五日 家光(花押)
酒井さぬきの守とのへ

徳川家光自筆書状 解読文

(2)「徳川家光自筆書状」(小浜市立図書館蔵酒井家文庫資料)

(教育普及係 井口 信久)

名 刀 展

—— 刀と刀装具にみる日本の伝統美 ——

附 刀匠 小沢 正壽遺作展

会期 平成 7 年 11 月 14 日 (火) ~ 12 月 10 日 (日)

本展覧会は、(財)日本美術刀剣保存協会及び同埼玉県支部(埼玉県刀剣保存協議会)の後援により開催し、23日間の会期中に17,834人の方々に入館いただき大変好評のうちに終了した。

我が国の長い歴史の中で培われ、武器として卓越した機能を極めながらも高い精神性を秘め比類ない芸術の精華として完成され、世界に誇る貴重な文化遺産である日本刀。本展はこうした優れた工芸品でもある刀剣、刀装具を通して日本古来の伝統美を鑑賞していただくため開催したものである。



展示室風景

展示は、日本刀の黄金時代を築いた鎌倉時代から南北朝時代にかけての古刀の中から備前刀及び相州刀の名品を中心とする11振で古刀の部を構成し、また、日本の代表的漆工芸である蒔絵の施された伝統的な工芸美の極地である拵の名品17点及び装飾的な意匠と技の優れた金工品である鐔、目貫、小柄など61点により刀装具の部を構成した。併せて、当館の開館に協力いただいた郷土埼玉が生んだ鬼才といわれた刀匠、小沢正壽氏(1920-1993)の遺作も21振展示した。小沢氏は飯能に住し、その現代刀匠としての技量は高く評価され新作名

刀展において度々受賞した。作風は備前伝から入り、晩年は名工正宗に私淑して相州伝の再現に努力し、優れた作品を残した。展示された小沢氏の備前伝、相州伝の優刀を通して現代まで代々受け継がれてきた刀鍛冶の伝統的な技とその美しさを鑑賞していただけたならば幸いである。

日本刀は、日本古来の製鉄法である“たたら製鉄法”から製造される玉鋼^{たまはがね}を材料とし、その鍛練の結果生じる美しい地肌、刃文などにより外国に例をみない優れた美術工芸品として高く評価されている。その日本刀が完成されたのは平安時代の後期で、鎌倉時代に多くの洗練された名工を輩出した。慶長(1596-1615)以前のを古刀、以後を新刀と呼ぶ。

刀の種類は、刀身の長短と佩用方法の違いによって分類されている。太刀は長さが2尺(1尺=約30cm)以上のもので、刃を下に向けて佩緒で吊り、銘が外側にあるものをいう。打刀は室町時代から盛んになり、長さ2尺以上で太刀とは反対に刃を上向きにして腰にさすため銘の位置は太刀とは逆になっている。脇指は打刀と同様に刃を上向きに腰にさす長さ2尺以下1尺以上のものをいい、室町時代以降打刀に添えてさすことが流行した。短刀は長さ1尺以下のものである。

本展では、古刀の部は備前刀と相州刀を中心に展示した。備前刀とは、備前(岡山県東南部)に住む刀工が平安時代から江戸時代にかけて作刀したものをいい、平安時代中期の刀工発祥の頃から室町時代末期の長船鍛冶衰亡にいたるまで繁栄した。平安時代には古備前派の友成、正恒、鎌倉時代には一文字派の則宗、助宗、吉房、助真、則房

や長船派の光忠、長光、景光、室町時代には盛光、康光、祐定らが名工として名高く、それぞれ時代に応じ、地鉄がよく、鍛えのすぐれた個性豊かな刀剣を造っている。

相州刀は、相模国（神奈川県鎌倉）に在住した刀工の作刀をいう。元来、相州鎌倉には刀工はいなかったが、鎌倉幕府開設後、武家勢力の興隆によって武家文化が成立し、刀工界が活況を呈し始めた13世紀中頃、山城から栗田口国綱、備前から国宗、助真らの名工が移住し鍛冶を伝え、国綱の子の新藤五国光らの名工が出て相州刀の基礎を築いた。鎌倉時代末期に正宗が出て相州伝の鍛法である地肌（にへ）に強い沸（にえ）が付き地景（ちけい）の入った働きのある大模様の刃文を焼いた妙技を完成した。しかし、秋広の時代以降、技量は衰退していった。

本展では、大江山の酒吞童子を退治した伝説で有名な宝刀「童子切安綱」の作者である伯耆安綱の太刀、備前刀では吉房の太刀、長光の太刀を、また、相州刀では国宗の太刀（重要美術品）、新藤五国光の太刀、秋広の短刀などを出品した。国光は短刀の名手として有名で、在銘の太刀は珍しいという。

次に刀剣の外装である拵（こしら）をみてみたい。鞘（はお）には朴などの比較的柔らかい木が用いられ、その上を布や皮革で包み漆で塗り固め色々な文様がほどこされるのが普通であった。江戸時代を通して武家は大小（刀と脇指）を帯びる定めで、この場合、鞘は黒塗りに、金具は図柄、地金ともに揃いのものを用いるのが定例であった。当時、時代の好みから豪華な螺鈿（らでん）、蒔絵（まきえ）、金銀などの飾り金具を施した華麗な色、模様の鞘も流行したが、制式の黒以外の塗りであるため「変わり塗りの何々拵」と呼ばれた。

装剣金具のうち小柄（こづか）、筭（こうがい）、目貫（めぬき）の三つをあわせて三所物（みつところもの）といい、同一作者が同じ材料に同じ意匠を施すのを原則とした。江戸時代の正式の大小拵には三所物をつけるのが通例であった。

本展では、対馬宗家に伝来した珍しい七宝糸巻太刀拵を始め、大名家に伝来した蒔絵の装飾の美しい変わり塗りの鞘、揃い金具のすばらしい大小

拵などの優品を展示した。

装剣金工の宗家が後藤家である。後藤家は、祐乗を始祖として、室町時代の足利義政のころに興り、京都を本拠として以後17代江戸時代末期まで日本の金工界において常に中枢をなし、その影響力は絶大であった。後藤家の作品は、装剣金具の中でも三所物を主に製作し、鐔や縁頭の作品は少ない。その作品の特色は、地金がよいこと、金銀を豊富に用いていること、伝統的な作風を代々継承していることが挙げられる。足利氏、豊臣氏、徳川氏と常に権力と深く結びつき家彫と称された。将軍家を始め大名が正装する場合は、後藤家の製作になる装飾金具で拵を飾るのが定例であった。

装剣金工のうち、後藤家の家彫に対する在野の金工師の作品を町彫と呼んだ。町彫の祖は、元禄初期（1690頃）の横谷宗珉で、始め後藤家の下地職人であったが、格式と伝統を重んじる後藤家の彫法に飽き足らず、野に下って独特の絵画風の図案と片切彫の彫法をあらわして世に迎えられたのが始まりである。奈良派、大森派、柳川派などが栄え、町人文化の台頭とともに町彫は全盛を極めた。郷土の金工師として忍藩に仕えた土屋正珉なども活躍した。

本展では、後藤家の三所物を始め、町彫の優品、正珉などの郷土金工の優品を数多く展示し、工芸美の極地を堪能していただけたと思う。

このたびの展覧会では、日本刀とそれに伴って発展してきた伝統的技術を身近に、直接ご覧になって理解していただくために、会期中の日曜日に3回にわたって刀剣製作に携わる職人の実演会も併せて開催した。刀匠、研師、鞘師、白銀師、柄巻師、刀身彫師、甲冑師の7職で、伝統技術のすばらしさ、奥深さに見学者の間から感嘆の声が聞かれた。実演会場には、一日中見学者が絶えなかったほど大盛況であった。

また、会期中の11月23日（木）には（財）日本美術刀剣保存協会の田野辺道宏先生を迎えて「日本刀の美と歴史」と題して講演会を開催した。満席の120名の聴講者があり大変好評であったことを附記する。
（館長補佐 小林 誠）

平成8年度の主な事業

○特別展示室の展示計画

- ◆第9回企画展 古墳時代の川越 3月23日(土)～5月12日(日)
- ◆第6回収蔵品展 7月20日(土)～9月16日(日)
- ◆第5回館蔵品展 岩崎勝平の素描 9月28日(土)～11月4日(月)
- ◆ミニ展 — むかしの勉強・むかしの遊び— 1月25日(土)～3月9日(日)
- ◆第10回企画展 町割から都市計画へ 3月22日(土)～5月11日(日)

○講座・教室

◆野外博物館教室

- 新河岸川河岸場跡を訪ねて 4月21日(日)
- 喜多院・東照宮を歩く 5月26日(日)
- 鎌倉道を歩く 10月20日(日)
- なつかしのチンチン電車の跡を訪ねて 11月24日(日)

◆古文書講座（連続5回講座）

- ① 5月18日(土)
- ② 5月25日(土)
- ③ 6月1日(土)
- ④ 6月8日(土)
- ⑤ 6月15日(土)

◆子供博物館教室

- ① 7月31日(水) ⑦ 11月17日(日)
- ② 8月1日(木) ⑧ 12月14日(土)
- ③ 8月2日(金) ⑨ 12月15日(日)
- ④ 8月22日(木) ⑩ 1月25日(土)
- ⑤ 9月28日(土) ⑪ 2月23日(日)
- ⑥ 10月26日(土)

◆土器作り講座（連続4回講座）

- ① 9月8日(日)
- ② 9月21日(土)
- ③ 9月22日(日)
- ④ 10月6日(日)

※予備日として10月13日

◆歴史講演会 — 室町時代の川越—

- 第1回 11月16日(土)
- 第2回 11月23日(土)
- 第3回 11月30日(土)
- 第4回 12月7日(土)

◆絵図を読む（連続4回講座）

- ① 2月15日(土)
- ② 2月22日(土)
- ③ 3月1日(土)
- ④ 3月8日(土)

・講座の募集は、広報川越・チラシなどで随時行います。詳しい内容等は博物館にお問い合わせ下さい。

○全館燻蒸のため休館 7月1日(月)～7月10日(水)

表紙の写真解説

心光院所用鉄線蒔絵膳 一具（小浜市心光寺蔵）

表紙の鉄線蒔絵膳は、酒井忠勝夫人である心光院の婚礼調度品のうちの一点です。この食膳はほぼ一具揃っており、大名家の食膳を知るうえでも貴重な資料といえます。

懸盤は総体を詰梨子地に、金・銀・青金の薄肉高蒔絵で表し、鉄線花を描いています。天板は同技法で、芒に朝顔の花東を描いています。

椀類・飯器などその他のものは、内側に朱漆を塗り、外

側は懸盤同様に、総体を詰梨子地に金・青金の薄肉高蒔絵で表し、鉄線花を描いています。

この食膳は、文禄・慶長期の作とされる高台寺の芦辺桐蒔絵と似た系統の、蒔絵技法を示しています。また、忠勝と心光院は慶長十四年（1609）に婚姻しているのです。このころ、つまり、慶長期の遺品と考えられます。

（井口 信久）

発行日

平成8年3月30日

発行

川越市立博物館

〒350 川越市郭町2丁目30番1号

TEL 0492-22-5399